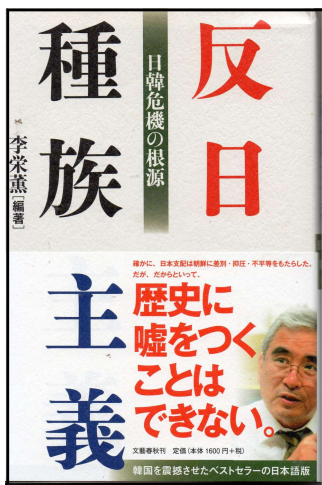


## 「反日種族主義」－日韓危機の根源 －日本語版



李栄薫編  
文藝春秋発行  
(2019 年 11 月  
15 日発行)

著者  
李栄薫  
朱益鐘  
金容三  
金洛年  
李宇衍  
鄭安基

フェイスブックで面白い本を発見した。

日韓関係が完全に冷え込んでいる昨今、韓国の反日世論を真っ向から否定し、韓国人よ歴史に嘘をつくなと言いつつ、暴漢による生命の危険をも顧みず、よくもこのような大胆な発言を文字にして発表したものだとその勇氣に感服する次第である。

この本の原本の韓国語版は2019年7月10日、韓国の未来社から発行され韓国でベストセラーになっている。

茂木弘道氏が代表代行の「史実を世界に発信する会」が本書を取り上げフェイスブックに書評を載せている。私はその書評を読んで本書に興味を持ち、直接購読し、得た内容を次に要約して述べる。

まず、題名の「反日種族主義」の意味がよく理解できない。本書の裏表紙には「反日種族主義とは？」と題して、その解説が記載されている。「韓国の民主主義は、西洋で勃興した民主主義とは別のもので、韓国の民主主義には、自由で独立的な個人という概念がありません。韓国の民主主義はそれ自体で一つの集団であり、一つの権威であり、一つの身分です。むしろ種族と言ったほうが適切です。隣の日本を永遠の仇と捉える敵対感情です。ありとあらゆる嘘が造られ広がるのは、このような集団心性によるものです。これが反日種族主義です。…」

さて、この本は、大韓民国の初代大統領

李承晩の理念と業績を広く知らしめるために設立された李承晩学堂が企画し刊行しました。李承晩大統領に対して日本人は彼が行った強硬な反日政策のために余り良い感情を持っていません。その李承晩を担ぐ李承晩学堂がなぜ、このような反日政策を否定する本を発行したか、その理由は長くなりますので省略しますが、この本に書かれていますので、直接お読みください。

この本の著者は、李承晩学堂の校長の李栄薫、同教師朱益鐘、同教授金容三の3名の他、落星堡経済研究所所長金洛年、同研究員李宇衍、東亜大東アジア研究院特別研究員鄭安基の3名で、李栄薫が総括編集をしている。次に各著者とその内容を簡単に紹介する。

先ず、李栄薫は「アリラン」、「独島」、「慰安婦」について述べている。「アリラン」とは趙延来の書いた大河小説で、朝鮮総督府が実施した土地調査事業に反対した農民を地元警察署長が独断で衆人環視の中で銃殺にするという荒唐無稽の筋書きで、銃殺された農民は全土に4千名に及んだと誇張している。その小説の舞台となった現地の金堤では「趙延来アリラン文学館」が建ち、それらしい絵と写真で朝鮮総督府の暴挙を宣伝している。しかし、李栄薫は、このような事実は全く存在せず、むしろ金堤には朝鮮総督府の干拓事業で、地平線が見える広大な平野が造成され、群山という都市も新たに開発されたと述べている。

「独島」については、韓国では歴史的に独島は韓国の領土としては認識されておらず、1905年日本が独島(竹島)を日本領に編入した時、朝鮮王朝は何ら異議を申し立てなかった。しかし、1952年李承晩大統領は李承晩ラインを発表し独島を一方的に韓国領に編入し、日韓間で独島紛争が発生した。2003年の盧武鉉大統領が独島に施設を建設し、観光を奨励するに及んで独島紛争はエスカレートされ今日に及んでいる。そして、独島は韓国人を支配する反日種族主義の鮮烈なる象徴として最も神聖なトーテムに浮上した。しかし、李栄薫は、「このような低劣な精神世界に留まっていたのでは、独島問題の解決は不可能です。挑発的な施

設は撤収し、観光への誘いは中止しなければなりません。そうしてから長い間沈黙して、日本との紛争は低い水準で管理し、最終的解決は遠い未来の世代に先送りしなければならない」と結論付けている。

「慰安婦」については、**李栄薫**は、「日本軍が慰安所を設置する以前から朝鮮には慰安所は存在していた。また、日本軍が撤退した後も、韓国戦争期の韓国軍慰安婦、それ以降の米軍慰安婦が存在していた。にも拘わらず、日本軍慰安婦が存在した1939年～1945年のわずか7年の慰安婦のみ切り離して日本軍の戦争犯罪だと責めるのは何故でしょうか。**李栄薫**は、これを**ぎこちない不均衡**と呼んでいる。韓国人は米軍慰安婦に対してはほとんど関心を示さないのに反して、日本軍慰安婦問題に対しては限りなく憤怒します。これはまさに反日種族主義という集団情緒が作用するからである」と解説している。

ちなみに、日本軍慰安婦として名乗り出たのは170名余、米軍慰安婦と名乗り出たのは2～3人、韓国軍慰安婦として名乗り出た人は皆無。これは、日本軍慰安婦問題については強力な支援団体が存在するが、他の慰安婦問題に対しては支援団体がなく、「最も古い職業」に従事した卑猥な女として一般の人から蔑まれているからである。

次に**金容三**が「鉄杭神話の真実」を紹介している。鉄杭神話とは、「日帝が朝鮮の地から朝鮮人の優秀な人材が出るのを防ぐために、全国の名山に鉄杭を打ち込んだ」という風水に基づく言いがかりである。

しかも、金泳三政権の時に、「光復五〇周年記念力点推進事業」という国家事業として鉄杭の除去事業を行った。日本政府がこのような馬鹿げた鉄杭を打ち込む筈はなく、大々的に鉄杭の捜査をした結果、出てきたのは測量の杭か船をつなぐ杭のみで、日帝が打ったという確証が得られなかったにも拘わらず、韓国人は未

だに風水被害であると信じている。

**金洛年**は「日本の植民地支配」について述べている。植民地支配に対する最も多い非難は「朝鮮の米を収奪した」ことである。これに対して、**金洛年**は米の収奪でなくて、米の輸出である。この輸出によって朝鮮はいかに恩恵を受けたかを統計的に解説している。

**李宇衍**は「徴用工」の問題を取り上げている。先ず、「強制徴用」は存在せず、「募集」と「官斡旋」だけであった。また、「朝鮮人の賃金差別」はなかったと事例を挙げて主張している。

**朱益鐘**は「親日清算」について述べている。親日清算とは、植民地時代に日本に好意を持って活動した人に「親日派」のレッテルを貼り、「親日人名辞典」を作成し、処罰するという政策である。

この政策は盧武鉉政権でさらに強力になり、朴正熙前大統領等韓国の近代化に貢献した人まで含まれるようになり、このような風潮を朱益鐘は嘆いている。

**鄭安基**は「陸軍特別志願兵」を紹介している。1938年から1943年にかけて施行された「陸軍特別志願兵」に約50倍の競争率を経て約18000名が入隊した。韓国が独立した後は、彼等は韓国軍将校として朝鮮戦争で大活躍をした。彼等に対して「反民族行為者」と叫ぶ反日種族主義者もいるが、彼等は紛れもない「祖国の干城」であると**鄭安基**は力説している。

最後に**李栄薫**は「反日種族主義は1960年代から徐々に成熟し、1980年に至り爆発した。反日種族主義に便乗し、韓国の歴史学会は数多くの嘘を作り出した。この本で告発したのはその一部に過ぎない。過ぎし30年間、韓国の精神文化はその悪循環でした。その中で韓国の精神文化は徐々に低水準に墜ちて行きました。

亡国の予感を拭い去ることができないのは、その原因を作った反日種族主義の横暴に対し、この国の政治と知性は余りにも無気力なためである」と結んでいる。